



南の光明

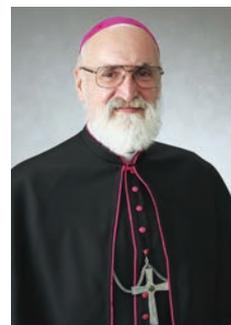
The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標
 ゆいまーるの心で
 あらゆる絆を深めよう！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
 カトリック那覇教区本部
 TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
 発行人 W.F.バート司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2021年9月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第754号 (9月号)

災禍のなかで



カトリック那覇教区
ウエイン・バート司教

Covid19による感染症が始まって二年の月日が過ぎようとしています。日本では、沖縄に寄港してから横浜に向かったクルーズ船ダイヤモンドプリンセス号での感染から始まった拡大が瞬く間に広まり、第一波、二波、三波、四波とうねり強めながら全国に波及し、現在の感染爆発状態へと至っています。

二〇二〇年二月、わずかな感染者数にもおびえながらも、この感染症が全国に広がることさえ想像することは出来ませんでした。それから、数カ月でこのウイルスは全世界に広まり、わたしのふるさとであるアメリカのマサチューセッツ州に暮らす母にまで感染症をもたらしたのです。

高齢で持病を抱え弱っていた母は、無論この感染症に抗うことは出来ず、親族に看取られることも叶わず、亡くなってしまいました。さらに私の姉や弟は母の遺体を引き取ることもでき

ず、遺骨となって戻ってきたのは数カ月後のことでした。このパンデミックは、物理的な距離にかかわらず何という分断、断絶を人類にもたらしたのだろうかと感じました。そのころを振り返ると、今でも、あの沖縄に来た同じウイルスが、遠く離れた母の体内にまで達したとは信じがたい事実です。

このような現実、悲惨な状況下でも私たちは生きていく限り、怯えるばかりで何もせずにとどまっていることはできません。ただ、以前と同様に動けば、これもまた感染拡大に手を貸すだけで、自らの首を絞めることになることも現実です。では、このような状況をどのように生きればよいのでしょうか。どのようなことが私たちキリスト者に求められているのでしょうか。その答えのヒントとなるカギを聖書に描かれた救いの歴史に求めたいと思います。

創世記、創造のわざに次いで描かれるのは、人間の罪の問題、原初の罪についてです。神と同等になれるという思い上がりから一被造物に過ぎない人間は、神に背いて自分に従う道を選択したのです。その時からあらゆる善の源である神と共にいることを失った

人間は、神と共にいることで完全に享受していた健康、命、愛、絆、などのあらゆるよいものをも損なってしまったのです。あらゆる善いものを全く失ったわけではないが、十全に享受できなくなったのです。

そして、このような神から離れた不幸な状態(原罪の状態)はすぐに兄弟殺害という悲惨な状況をもたらします。しかし同時に神による救いの歴史もこの時に始まったのです。この物語は決して過去の出来事を書き留めたに過ぎないものではありません。神を見失っている現在の私たち人類の霊的な現実を描いているのです。

ですから、今現在も私たちが神を見失うと同時に神の救いの業は始まり続けているのです。自らの愛の幸せを分け与えるために人を創造された神は、人間の不幸を見過ごすことのできないお方なのです。この聖書が伝える救いの歴史の始まりがそうであつたように、その流れを見ると不思議なことに、人間の罪とそれに伴う大きな不幸、惨状、どうすることもできない程の天災、敗戦、捕囚、奴隷状態、彷徨、殺戮、異民族支配などのありとあらゆる災禍や悪に苦しむときこそ救いの手

が差し伸べられるのです。ノアの箱舟、出エジプト、バビロンからの帰還など、神の民全体からの体験のみならず、個々の人生においても、パウロの回心のように危機や弱さの中で差し伸べられる神の手は枚挙にいとまがありません。

では、神は人間が弱っているとき、危機にある時しか助けて下さらないのでしょうか。もしそうならば神は人の不幸を待っておられるのでしょうか。決してそうではありません。放蕩息子のたとえを使ってイエス様が伝えたのは、息子が出てゆく前からずーっと変わることもなく愛し続けていた父の姿です。

私たちは、困窮し、弱り、苦しみ、不幸な状態にならないければ、ずっと支えてくださっている父の愛に気が付かないのです。だから父のもとを離れて不幸な目に合わなければ気が付かなかった弟も、父から離れずにつつとその愛に包まれていた兄も、全く同様に父の愛に気づけなかつたのです。このように人間の神に対する関係性の現実を見失うことなく救いの神へと心を開けなおすよう回心と呼び掛けているのです。

(次頁に続く)

パウロの回心、
わたしたちの回心

「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ロマ五・8)と述べ、先行する神の愛に気付く回心の道を歩んだ聖パウロは、「主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足していません。なぜなら、わたしは弱いときこそ強いからです」(二コリ十二・9、10)と宣言し、さらに「わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません」(ガラ六・14)と繰り返し回心と呼び掛け自らの回心の体験、全ての人に対するイエス・キリストによる救いの実現を述べ伝えました。

愚かな従順によって神ご自身から人と神の関係を修復されたのです。こうした神の救いの手に触れた聖パウロは、「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」(一コリ一・21、25)と喜び伝えるのです。ここに示された神の姿は、自ら離れた人間を愛し続け、救いの手を差し伸べつつも、自由な気づきを尊重する御父、その御父の愛を命がけの従順によって届けた御子、そのお二人の愛への気づきをもたらし、広める聖霊の三位一体の神の姿でした。

救いの歴史の頂点は、まさに最も悲惨な死である十字架刑と死からの復活でした。私たち人間の思い上がりを、人間の自由意思を奪うことなく超えて行ける手立ては、人間にとつて最も愚かで惨めな十字架刑によるいのちの主の死と復活だったのです。賢い選択と思つた不従順によって神との関係を断つてしまった人類に対し、死をもいとわぬ

受け継ぎ、伝え行くのは主イエスと共に神との和解に生きる私たち教会共同体であると確信しています。神から離反した状態がある限り、いままもいつもいきいきと救いの歴史を導き続ける神の姿を体現することこそ教会の使命であると。

教会のありとあらゆる活動は、この宣教へと向けてなされなければならぬこと、その宣教は聖霊の促しによる言葉と行いによってなされなければならぬことをパウロはその言葉と行いによって示し、民全体の回心、人類全体の回心と神との一致を目指しました。この壮大な目標は、私たち教会の使命です。

今、これまで以上に地球環境に対する人類の態度が問われています。このパンデミックのみならず、大洪水、熱波、巨大台風、海面上昇など等は、すべて人と人との関係や人と自然界の関係、人類の被造界全体との関係によるものだと考えられるからです。物質的豊かさを追及すると他より多くを集めます。他より多くを集めると収奪と格差を生み出します。物質の一部である人間中心の世界観に基づく限り、地球上に限らず宇宙のどこでも、被造界全体に対して収奪は収まりようがありません。創世記に示された人間の根源的な罪の問題は、いのちの源を失った不安から収奪に始まり、その結果として悪(善を欠いた状態)がはびこる世界になるといふ、いまの世界を見事に指摘しています。社会のあらゆる面で求められているSDGsは大

切な取り組みです。しかし、いくら目に見える結果を求めて行動したとしても、すべての人に及んだ原初の罪「神を認めず自己に従うこと」を先ずは止め、神への回心と和解の結果として「あらゆるものとの絆を深める」生き方を追求し、そこから隣人との接し方に始まり、地域や自然に代表される環境やありとあらゆる被造物との関係を正してゆかないならば、その活動はいずれ新たな収奪の手段と化してゆくと思われます。

自分を存在せしめ、そのいのちを支え続ける創造主を認め、その愛に気付く、まずは神に立ち返る。そこを出発点として、隣人をはじめ、ありとあらゆる関係を修復し、あらゆる絆を深めてゆくこと、そしてその先に人類全体の回心を目指す必要があります。でもそれは、どう考えても不可能なこととしか思えません。そうです、人間には不可能なことでしょう。しかし、私たち神の民を生かしているのは聖霊であり、神の力によってキリストのいのちを生きているのです。神のいのちに生かされた結果は、おのずから人類全体の隣人愛、和解、平和の実現へとつながると信じます。

皆さんの健康を祈り求めます。世界のすべての人のいのちの充実を祈り求めます。何一つかけることのなく存在の満ち満ちた世界を切に祈り求めます。神ご自身がすべてにおいてすべてとなりますように。アーメン。

(二〇二一年八月二十三日)



聖母マリアよ、
われらの助け、
よりどころ!!

セクウェーラ・ナビーン・ジョセフ神父
普天間教会 主任司祭



「時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした」(ガラテアの教会への手紙四・4〜5)。神は聖ヨゼフの配偶者、イエスの母になるべき娘を大いなるはからいで選びだされました。こうして、女の中でもっとも神に愛された聖母マリアが、原罪からまぬがれてその母の胎に宿られました。教皇フランシスコはよく、教会のイメージとしてびったりなのは、マリアの母性だといわれます。「教会は女性的な存在です。教会は母です」と教皇フランシスコは語

られます。聖母マリアは、教会の母性のモデルであり、そのインスピレーションを与えるばかりではなく、教会の生活と司牧のもの、思いやり・愛情に満ちたものの源です。マリアのふところから離れるならば、教会はもはや愛に満ちた母であることはできなくなりませう。だからこそ、うまくいっている時も困っている時も、聖母マリアを見つめなければなりません。

ん。永遠の「キリスト信者の助け」(聖マリアの連願)である聖母は、いつもわたしたちを支え、ともにいてくださり、御子の導きを取次ぎ、その子どもたちを見守ってくださいませ。聖母マリアは、希望、いやしをその母性に満たしたわりを必要としているすべての人に与えてくださいます。聖母マリアはご自分が目立つて、キリストから目をそらさせたりはされませぬ。教会は、いつも助けに来てくれ、祈ってくれる、母、姉妹、友としての聖母の役割を語ってきました。聖母はわたしたちを、キリストに導き、キリストにとりなしてくださいます。そして、キリストが人間の弱さを補ってくださいませ。わたしたちは多くをその母から学ぶことができます。聖母にならって、福音を生き、イエスを尊び、その証をするべきです。

一、助けを必要としている人に助けの手を差し伸べること。
マリアは神の母に選ばれましたが、それにもかかわらず、エリザベトに助けの手を差し伸べます。その助けの手を差し伸べるときに、大事なことはキリストを連れて行くことです。キリストが共にいてくださる時だけ、その助けは喜びに変わります。教皇フランシスコがこう言われます。「エリザベトとザカリヤの

家は、マリア様と共に、マリアを介して訪れたイエスによって、喜びはもとより、希望と、祈り、賛美をもたらす信仰の雰囲気は満たされた」と。だからこそ、どんな仕事の前にも、どんなことを始める前にも祈りをするのです。マリア様が伝える一番大事な教訓は、キリストと共に歩む習慣を身に付けて、出会う人々にキリストの喜びをもたらすことです。

二、いただいたものすべてに對して、神様を賛美すること。

マリア様は賛美と感謝の心を持っていた方です。ご自身が持っているすべては神からの祝福であると認められた方です。そのため、大事なものはへりくだった心です。マリアはそのような方でした。大天使のお告げの時、マリア様が語った言葉、「私は主のはしためです、お言葉どおりになりませうように」はマリア様のへりくだった心を示しています。マリア様が伝える二番目に大事なことは、へりくだった心で神様を賛美することです。

三、神様を深く信じること。信仰はマリア様の生涯の中心でした。

すべてを神様に委ね、神様に信頼すれば、神様は守ってくださいませ。なぜなら、神様は約束した憐れみをお忘れにならない

いからです。マリア様が伝える三番目の教訓は、すべてを神様の御手に委ねて生活することです。わたしたちの生活はしばしば苦悩に満ちたものですが、神様はいつもその人を助けてくださいます。そして、終わりの日に永遠の命を与えてくださいます。

マリア様は母としていつも私たちと共に歩まれます。母のマントの下に居場所を見つけてみましょう。教皇フランシスコが言われるように「マリアなしにキリスト者は孤児」です。現在、私たちも試練の只中にいます。コロナ感染症が拡大して中々終らない不安、悲しみ、苦しみの中で迎える二回目の聖母の誕生日(九月八日)なんです。マリアのように自分たちの弱さを認め、神様の偉大な力にすべてを委ね、信頼関係から生じる希望の光に照らされて「この試練の中にも私は一人ではない」という確信をもってマリアと共に信仰の歩みを続けましょう。

聖母マリアよ、沖繩の、また、世界中の兄弟姉妹が健康で安全に暮らせませうように、聖母のいたわり・いつくしみをこい願います。「病人の希望」(聖マリアの連願)なる母マリア、感染拡大からわたしたちを守り、救ってください。聖母マリア、私達の助け、抛り所、私たちのためにお祈りください。

2021年8月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2021年8月3日(火) 10:00～12:05、緊急事態宣言中につき、3回目の ZOOM 会議。

1. 報告及び連絡事項：始めの祈りはウェイン司教、司会はクレーバー神父が担当。

- ・前回(7月会議)の議事録の確認を新田が行い承認を得た。
- ・「南の光明」に掲載された記事やお知らせについて、確認が不十分なまま掲載されているため、誤った情報が載ってしまっているので、編集委員の面々は扱いに十分気をつけるようウェイン司教から指示があった。
- ・コザ教会主任のピーター神父から、教会献堂50周年を記念して作成された DVD の紹介と、購入への協力依頼が行われた。

2. 審議事項

- ・沖縄県から出された緊急共同メッセージに対して、教会としてどう応じていくべきかの協議が行われた。各主任司祭の取組みと意見が述べられ、ウェイン司教が総括して、8月15日(日)まで、全ての公開ミサと集会を休止することが決定された。16日以降については状況を見ながら判断していくこととし、15日までの休止については教区から公文を出して通知することも決められた。
- ・サマーキャンプについて、コロナ禍が落ち着いてからでないと具体的な提言はできないが、教区の青年たちとも相談しながら、時期にとらわれず、青少年のための何らかのプログラムを考えていきたい旨報告が行われた。
- ・「南の光明」について、編集上の課題も多く見られるので、人員の増員等も含め、様々な検討が必要であり、大切な媒体であるので、より良く活用できるよう見直していくことが提言され、これを継続して話し合うことも合わせて了承された。
- ・ミッションビーチの利用について、津波古事務局長から報告があった。ビーチの開け閉めの判断は、県や近隣施設の動向も見ながら行っており、また密集を避けるため一日の利用者数などもきめこまかにコントロールしてもらっている。15日までは閉鎖とするが、管理人さんの勝手に開け閉めを判断しているわけではないので、司祭といえども管理人を困らせるような要求はしないよう注意が促された。
- ・マーシーさんから司教日程について調整が行われた。8月の公式訪問について、1日の与那原はおこなわれたが、15日の首里については沖縄県の緊急共同メッセージによって変更されるため、9月以降に訪問の機会を定めるよう要請があった。

3. その他

- ・8月5日から15日の間、県の「家でも外でも集わず、出かけない」という要請に応えるため、全ての公開ミサと集会を休止するよう、ウェイン司教から重ねて要請が確認された。
- ・次回司祭助祭拡大会議は2021年9月7日(火) 午前10時から12時、教区センターで行う予定であることが報告された。

2021年8月16日 承認：ウェイン・フランシス・バートン司教 記録：新田 選



私の幼少年時代は、両親の離婚により母方の実家で、高校を卒業するまで過ごししました。兄弟三人で兄と姉、それは貧しく学校での行事のたびに肩身の狭い思いをしていたのを覚えています。

近くに叔父、叔母、同居のおばーちゃんもいました、やはり出戻りの母、私たち兄弟にとつても、少なからず差別的な思いを感じていました。学校での授業参観、父の日、運動会親子リレー、両親のいる同級生がうらやましく思いました。私が小学校六年生の時、兄が新聞配達を始め、私もたまに一緒に手伝いをするようになりまし

た。しばらくすると兄が行かなくなり、いつの間にか私が責任を持ち配達をするようになりまし。中学三年の途中まで配達をしていました。母の役に立ちたいとその頃は収入をすべて渡していました。今思うと朝早く起きてよく頑張つてたなと思います。高校生になった私、相変わらずお金がなく、学費は奨学金、部活もしましたが中途半端に辞めてしまい、バイトもしながら卒業しました。

高校卒業後、私は社会人になり就職、進学なんて考える余裕すらありません。奨学金を返済しながら働き、そして同級生の妻と結婚、子供にも恵まれました。私も親になつて子育て、生活の大変さを知り、母の苦勞を改めて感じました。私は負けまいと二十代の頃から日々仕事に没頭し、

将来を夢見て、勤め先での残業、会社の付き合いにも参加して家族を顧みない日々もありました。

同じころ兄も結婚二人の子供に恵まれます。そして今から十八年前、私の母が病気で六十九才の若さで他界、そして兄も十年前病気で四十七才の若さで他界します。母と兄の死後、忙しさで心に余裕もなくいら立つ日々、その後、私の妻はストレスからこの数十年体調をくずし、私も三年前職場の健康診断で病気が見つかり入院、手術も受けました。さいわい今は健康になり日

たて軸よこ軸
キリスト教との出会い

名護教会 伊佐 勝治

常の生活、仕事にも全然影響なく過ごせています。入院中、これまでの人生を振り返る事が出来ました、結婚して三十年が過ぎ、仕事中心で家族を養うためと思っていた私。ある日娘が、退屈でしようと、本を何冊か持って来てくれて、中の一冊に世界の偉人の言葉とある本があり、好んでその本を読んでいました。繰り返し読んでいるうちに、癒され、深く考えさせられました。いつしか心改め、今後の人生を清く正しく送りたいと考え始める様になります。その頃私は、世間は自己中心の人が多いか、争いが絶えず、人々の欲望が渦巻いているように思えてなりませんでした。

幼少年期の人々の笑顔もあまり見られなくなり、皆、日々忙しく生きていくように思います。お互いに思いやりもない時代のように感じていました、心改め親切な人として、生きていきたいと思うようになりま

す。それから二年程過ぎたころ、妻と教会に行つてみたいと相談、心配事の絶えない妻も行ってみたいと意見が一致。生れも育ちもうちなーんちゅ、子孫繁栄、あたり前に先祖崇拜、仏壇に手を合わせて来た私がないと思つていた私、入院中に読んでいた本を思い出し聖書を読んでみたいと思うようになりまし。そして導かれるように一年前、名護教会、ボスコ神父と出会い、私と妻の聖書の勉強が始まりました。教会の静寂に癒され、心地良さを感しました。「人は何の為に生きていますか」一瞬戸惑う二人、私は家族の為、子孫繁栄、社会の為に答えました。神父は聖書について語り、イエスキリストについて話してくれました。私と妻はその言葉、聖書の教えの深さに感動し、聖書を学んで行くうちにこのような場所、人々と一緒に愛を持って人生を送って行きたいと益々思うようになりまし。

ボスコ神父のアドバイスも受けながら妻と二人の祈りの日々が続きます。世の為、苦しんでいる人々の為、教会、家族の為に私はこれからも祈りたいと思います。今年、ミサへの参加を促され、三月に初めて参加、その頃まだ私はあと一年聖書をじっくり学びたいと思つていました。しかし、ミサで皆さんと参加しているうちに、

早く洗礼を受けたいと思うようになり、神父にも勧められ、令和三年五月二十三日に、結婚式と、洗礼を受けました。

洗礼名(聖ヨセフ)伊佐勝治、妻(聖マリヤ)伊佐美津江です。これまで聖書を教えただけだった名護教会、ボスコ神父には感謝しています。心癒されいつも楽しみにしています。それから私と妻の為に祝福して頂いた名護教会の皆様にも、本当にいろいろ教えて下さりありがとうございます。

信者として学びが多くあります、今後も学びは続きます、これからもよろしくお願ひします。

私の好きな聖書の教えです。(マタイ5:1-20) すべて書き記したいのですが一部分です。

- ・心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
- ・悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
- ・柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
- ・義に上渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
- ・憐み深い人々は、幸いである、その人たちは憐みを受ける。
- ・心の清い人々は、幸いである、その人たちは神をみる。
- ・平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
- ・義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

The Activity for our Children in this New Situation

By : Fr. Joachim Phan Dinh Hoai

Dear brothers and sisters in Christ,

We all know that every year we organize Summer Camp for our children at Mission Beach as one of the most important event in our Diocese. Thanks to the Summer Camp, many of us have been spiritually nourished to grow in faith and in solidarity of our Christian communal life.

Since I came to Okinawa in 2009, every year I joined the Summer Camp as helper together with other brother priests. On such occasions, I had chances to celebrate Mass, pray the Rosary, joined the camp fire and other activities with the children. I tried to mingle with the youth to journey with them as one flock toward the “green pastures” of joy and harmony. Through the Summer Camp, I could more and more understand the way of thinking of the youth.

We all know that the Summer Camp provided good environment and atmosphere for our children to enjoy the summer together. In those occasions, they were taught the value of “Yuimaru” (solidarity), and how to apply this unique value in such concrete situation such as helping and taking care of one another during the camp. The children also learnt Catechism and practiced Bible sharing and so on...

Recognizing the importance and meaning of the Summer Camp, during 52 years our Bishops, together with all the faithful of Naha Diocese, have consecutively organized this event yearly, with the hope that we would help our children to grow up in faith and bound together as a true Christian family of our Naha Diocese.

However, unfortunately, because of Corona Virus, from last year we could not have carried out the Summer Camp. More than anyone else, our Bishop Wayne would like to take care of our children in this critical situation. That is why recently in every priest meeting, we discuss together and look for the possible way to gather the children so that they can at least celebrate Mass, pray and play as one family. As the priest in charge, I constantly pray to the Lord for the safety of your family and children. I also try to keep contact with the youth’s leader group with the hope that I can encourage and share with them the spiritual unity.

Actually, after asking advises from Bp. Wayne and priests, the youth leaders and I recently made an action-plan to respond to the need of the situation. We decided that instead of big gathering at Mission Beach like previous years, from now on, when it is possible, we shall gather children from two or three parishes together. Hopefully such gathering will help our children to be happy.

The plan will not be possible without your prayers and help. So, in this opportunity, I would like to invite you all, let us pray in unison and take care of our children. Teach them to pray and take them to go with you in participating in the Holy Mass. And, when we are able to gather the children, please help us as you have always done before.

Through the intercession of the Virgin Mary, may God bless your family! May God keep all of us, especially our children in His protection!

2021年「世界難民移住移動者の日」委員会メッセージ

「ひたすら『わたしたち』でありますように」

教皇フランシスコは、まもなく日本語版が出版される回勅『兄弟の皆さん』（仮題）から今年の世界難民移住移動者の日メッセージのテーマを選ばれました。「ひたすら『わたしたち』であるように（35参照）」という呼びかけです。教皇はわたしたちに、パンデミックの影響による大きな危機を経験している今、もっとも大きな犠牲を払わされる難民、移住者、社会の隅に追いやられている人々が「あの人たち」ではなく「わたしたち」となるよう招いておられます。

昨年、渋谷区の路上のバス停ベンチでホームレスの女性が殺された事件が起こりました。その時、多くの人たちが、「彼女は私だ」というプラカードを掲げ、同じ路上に出てデモをしました。こうした動きは、世界中のすべての人、すなわち、自国民か外国人か、居住者か滞在者かを区別せず、現在と将来世代のために、わたしたちの共通の家をケアし恩恵に与ることから排除される人がいてはならないという教皇の訴えとつながっていきます。また、教皇は同回勅を引用して次のようにも呼びかけています。「わたしたちはともに夢を見るよう招かれています。夢見ることを恐れてはなりません。そして、一つの人類として、同じ旅路の仲間として、共通の家であるこの同じ地球の息子、娘として、すべての兄弟姉妹とともに夢見ることを恐れてはなりません（8参照）。」

この夢を見る一人ひとりの行動を主が祝福してくださいますように。

2021年9月26日

日本カトリック難民移住移動者委員会 委員長 松浦悟郎・担当司教 山野内倫昭

典礼暦

九月十四日は「十字架称賛の祝日」、その翌日は「悲しみの聖母」の記念日です。この二つの祝日は、十字架の伝統的な姿を目に見えるかたちでまとめられています。福音書記者ヨハネの記述は、十字架のもとにおとめマリアがいたことを示します。ヨハネは、イエスの死に際してイエスとともにとどまった、ただ一人の使徒です。

ところで、十字架の「称賛」とは何を意味するのでしょうか。恥ずべき処刑の道具を敬うことは、もしかすると人をつまづかせるのではないのでしょうか。使徒パウロはいいいます。「わたしたちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものです」（コリント一・23）。しかしながら、キリスト信者が称賛するのは、すべての十字架ではなく、イエスがその犠牲によって聖なるものとした、深い愛の結果とあかしとしての十字架です。キリストは十字架上で、人類を罪と死の束縛から解放するために、自らのすべての血を注ぎました。そのために、十字架は、呪いのしるしから、祝福のしるしへと、死を表す象徴から、最高の愛を表す象徴へと造り変えられました。この愛は、憎しみと暴力に打ち勝

ち、不滅のいのちを生み出します。典礼はこう歌います。「わたしたちの唯一の希望である十字架よ」（O Crux, ave spes unica!）。福音書記者は、十字架のそばにマリアが立っていたと述べます（ヨハネ十九・25〜27参照）。マリアの悲しみは、御子の悲しみと一つのもので、それは信仰と愛に満ちた悲しみです。カルワリオ（されこうべの場所）で、おとめマリアは、自らの「おことは通り、この身に成りますように」（フィアット）を御子の「御心のままに行ってください」（フィアット）と結びつけることによって、救いをもたらすキリストの悲しみの力にあずかりました。親愛なる兄弟姉妹の皆様、霊的な意味で悲しみの聖母と結ばれながら、神に対してあらためて「はい」と言おうではありませんか。

神はわたしたちを救うために十字架の道を選ばれました。それは世の終わりまで働き続ける、偉大な神秘です。この神秘はまた、わたしたちの協力を求めます。マリアの助けによって、わたしたちが日々十字架を担い、イエスに忠実に従って、従順と犠牲と愛の道を歩むことができますように。（教皇ベネディクト十六世の二〇〇六年九月十七日の「お告げの祈り」のことは、十字架称賛と悲しみの聖母の祝日にあたって）

回勅 兄弟の皆さん ● 教皇フランシスコ 2021年9月11日発売

利己主義による分断が進み、他者の苦しみを顧みない現代世界の闇を具体的に検証し、「よいサマリヤ人」のたとえを糸口にして、愛がもつ寛容性と普遍性について説き、弱者を切り捨てることのない開かれた世界を生み出すための道筋を希望をもって提言する。イスラームの指導者との対話から刺激を受け執筆された、兄弟愛と社会的友愛に関する社会回勅。

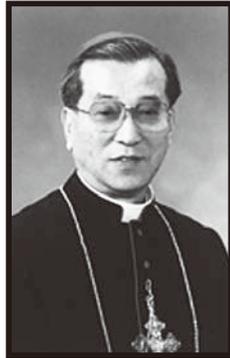
グラント・イマーム、アフマド・アル・タイブ師と教皇が共同で署名した文書「世界平和と共生のための人類の兄弟愛」を巻末に付録として収める。【原文の発表年月日】 2020年10月3日

◀『回勅 兄弟の皆さん』単行本 教皇フランシスコ（著）・西村桃子（翻訳） ¥1760



訃報

京都司教区名誉司教ライムンド田中健一司教が、7月29日(木)午後4時58分、愛媛県宇和島市内の病院で、誤嚥性肺炎のために帰天されました。93歳でした。
司教の永遠の安息のためにお祈りください。



ライムンド田中健一名誉司教略歴

- 1927年 8月31日 愛媛県宇和島市にて誕生
- 1951年12月21日 司祭叙会(高松にて)
- 1976年 9月23日 京都教区司教叙階
- 1997年 6月15日 京都司教引退、京都名誉司教
- 2021年 7月29日 帰天

公開ミサの休止延長について

新型コロナの感染拡大で緊急事態宣言、そして延長が発令され、本教区では、8月15日までミサを初め、全ての教会活動を休止しました。その後、2回にわたって緊急事態宣言が延長されましたが、その都度、司祭助祭会議をリモートで開き、教会活動休止も延期することで対処してきました。

現在、9月5日(日)までのミサの非公開が決まっています。その後については、コロナの感染状況、政府の対処、県の要請などに応じて、司祭会議で決めていきます。平日のミサ、聖体拝領、ゆるしの秘跡、聖体訪問などについては、主任司祭と相談してください。

ウェイン司教様は、各小教区への通知の中で、私たちの信仰生活について、次のように勧めておられます。「公開ミサ休止期間中は、これまで以上にキリスト者として神と共なる霊的生活が必要となります。個人的な聖体訪問やロザリオの祈り、また必要に応じて霊的糧を摂取するため、個別に聖体拝領などはできません。そして、特に聖書に親しみましょう。」

訃報

- ◆開南教会
マリア 石渡 保枝 様
二〇二二年八月八日帰天 享年四十九歳
- ◆読谷教会
ヴェロニカ 與那嶺 初枝 様
二〇二二年八月八日帰天 享年八十四歳
- ◆与那原教会
マリアクララ 照屋 勝世 様
二〇二二年八月二十一日帰天享年八十六歳
- ◆安里教会
ベトク 大城 勇人 様
二〇二二年八月二十三日帰天享年五十七歳

NPO 法人ぶどう園の会
訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001
住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15
・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
・営業時間 8:30～17:30
・営業日 24時間365日(緊急対応含む)

葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里烏掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間 受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

*創業30数年・・・。
*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。
「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間 受付

てんごく
☎098-853-1059